

松本典昭著

『メデイチ宮廷のプロパガンダ美術』

——パラッツォ・ヴェツキオを読み解く——

増 永 菜 生

本書の舞台は、一六世紀フィレンツェの政庁舎パラッツォ・ヴェツキオであり、著者は「美術史と政治史の交差点」に立つことでコジモ一世（一五一九～一四七四）の文化政策を読み解くことを目指している。著者は、フィレンツェ留学中に、政治史の枠組みから美術を読み解くという視点を得て、その素材としての宮廷画家ヴァザーリの図像解説書『ラジョナメンティ』に出会ったという。一六世紀フィレンツェを対象とする従来の歴史学研究は、美術や文学を軽視する傾向があり、また政治史と文化史は関連付けられないまま論じられてきたことを著者は指摘する。一方、近年の美術史においては、作品を注文するパトロンと芸術家の間のパトロネージ関係が注目されるようになっていくという。著者は、文献資料として『ラジョナメンティ』や書簡を、美術資料として絵画・彫刻を読み解いていくことで、パトロンと芸術家の意図やその政治的影響を分析し、政治史と文化史の溝を埋めようとする。そこで著者は、図像と史実との差異という問題に触れる。為政者

が、自身のイメージ戦略のために図像を用いることは古代の歴史より行われてきていることだが、図像上の為政者の華々しいイメージは、必ずしも史実に忠実だとは限らない。この差異を踏まえた上で、共和制の伝統が根強いフィレンツェにおける君主の自己宣伝を検討するという著者の視点は、新たな「自由」概念が広まる中で、どのようにして新時代の「君主」が誕生したのかという問いの解明につながると考えられる。以下で本書の内容を紹介していく。

序章「パラッツォ・ヴェツキオの歴史」では、フィレンツェの歴史を語る上で、政治の中心である政庁舎の歴史という視点が欠けていたことを著者は指摘し、一二九九年の政庁舎建設着手から本書の主人公コジモ一世の時代までの、政庁舎と都市の歴史を整理する。政庁舎が一一三五年に落成した一二〇年後に、コジモ一世の祖先であるメデイチ家当主コジモ・イル・ヴェツキオ（以下老コジモと表記）が市政を掌握し、フィレンツェにおけるメデイチ統治時代（一四三四～一四九四）が始まる。続く共和制時代（一四九四～一五二二）の間も、政庁舎の工事は断続的に行われていった。メデイチ家の復帰（一五二二）、および最後の共和国体制（一五二七～一三〇）を経た後の政庁舎は混乱の為に荒廃したままであった。一五三七年、いよいよコジモ一世が第二代フィレンツェ公となり、一五四〇年にメデイチ邸から政庁舎に移り住んだことで、政庁舎は城塞風の質素な造りから、豪華絢爛な「公爵宮殿」へと変貌する。このコジモ一世が手がけた工事は、政庁舎史上最大の、君主の政治的戦略と結びついた大改築であることを著者は主張する。

第1部「絶対君主と喧伝大臣」は、全三章によって構成され、まず第一章「コジモ一世の絶対君主制」では、コジモ一世の誕生からフィレンツェ公としての即位までが叙述される。メディチ家の傍系「弟脈」出身であるコジモ一世は、「統治者になり得ない家柄」に属しており、即位当初は公爵でさえなく「首長にして第一市民」として選出された。このような出自を持ったコジモ一世だからこそ、政庁舎の改築によって「統治の正当性」を都市内外に視覚的に喧伝する必要があった。本章では、非フィレンツェ人の官吏を登用し権力を握り、旧支配層である都市貴族の影響力を削減することで、コジモ一世が権力を徐々に手中におさめていく過程が、制度面から説明されている。

第二章「ヴァザリーのパラッツォ大改造」では、コジモ一世と宮廷芸術家ジョルジョ・ヴァザリー（一五一一―一七四）のパトロネージ関係に基づく政庁舎の大改築が描かれる。一五五〇年に機能の一部がパラッツォ・ピッティに移されると、政庁舎はパラッツォ・ヴェッキオと呼ばれるようになる。君主の私生活の場はパラッツォ・ピッティ、公的政治の場はパラッツォ・ヴェッキオと分けられ、後者はますます政治的な役割を強めていく。アレツツォ出身のヴァザリーは、芸術家・職人と交流しつつ、一五五〇年には『美術家列伝』をコジモに献呈し、翌年以降は、一九年間にわたってパラッツォ・ヴェッキオの大改築に関与し、コジモ一世の文化政策に大きく貢献した。

第三章では、ヴァザリーの『ラジョナメンティ』をもとに五百人広間の天井画が読み解かれる。この天井画には、フィレンツェの領域、ピサ戦争（一四九六―一五〇九）とシエナ戦争（一五五

四―五五年）、前七〇年の都市建設から一四三四年の老コジモ帰還までの歴史が描かれ、広間の中央の円形画「コジモ一世礼賛」は、コジモ一世がトスカーナの時空間的な中心に在ることを示しているという。都市内外の貴族や大使が訪れるこの広間の改築には、視覚的にメディチ君主の存在をより多くの人々に向けて喧伝することによって「フィレンツェならびにシエナの公爵」という称号より高位の称号を狙うというコジモ一世の意図があったとされる。

第2部は全三章によって構成される。第四章「パトロン・画家・構図助言者」では、パトロンであるコジモ一世、画家ヴァザリー、構図助言者のコジモ・バルトリの関係が検討される。史実に忠実な作品制作と政治情勢の反映との間で葛藤するヴァザリー、特に「コジモ一世の間」については、他の部屋の寓意画との美的バランスを重視するバルトリ、その一方で領域拡大におけるフィレンツェの威信を重視するコジモ一世。「描かれた歴史」の背後には、「描かれなかった歴史」や歪曲された歴史があるということと、三者は互いの領域を侵犯し、工事は情勢に影響を受けながらその都度変更されていったことを著者は主張する。

第五章「レオ・ド・メディチの区画」を読む」では、政治史的観点から次の三点が強調される。描かれた場所が共和国政府の心臓部である点、描かれた時代が絶対君主制の形成期である点、描かれた内容がメディチ家の歴史である点である。この区画の間にはそれぞれ、老コジモからコジモ一世に至る六人のメディチ家の中心的人物の歴史が描かれており、そこでは軍人として戦功をあげた父ジョヴァンニをコジモ自身の前に描くことで、メディチ家が「弟

脈」に移っていくことが主張されている。「弟脈」出身のメデイチ家当主としての自身の正統性を主張するというコジモ一世の意図があったというのである。

第六章「レオ一〇世のフィレンツェ入城」では、「レオ一〇世の間」が取り上げられる。この間のフレスコ画は、一五一五年の実際のイヴェントを扱ったものであり、ヴァザーリは、レオ一〇世を芸術の黄金期のメデイチ家出身教皇として描き出しているが、その一方でその時代の政治・財政についての厳しい現実を描いてはいない。つまり、メデイチ家の権力が危うい時期にこそ威信を示すために豪華な入城式を催す必要が同家にはあったのであるが、ヴァザーリは暗い現実を見ることなく、この入城式の両義性の一面面を描いたのだと著者は述べる。

第三部「コジモ一世の二つの戦争」では、「モンテムルロの戦い」(第七章)と「シエナ戦争」(第八章)というフィレンツェの征服戦争を題材にした作品が主に分析される。モンテムルロの戦い(一五三七)は、「フォルツシエーティ」という反体制派の亡命者集団の軍とコジモ一世の軍が争ったものである。亡命軍の頭のフィリッポ・ストロツツイ(一四八八―一五三八)は「最後の共和主義者」と呼ばれ、敗北後自害した。絵画では、捕虜となった亡命者たちが屈服の姿勢で描かれる一方、コジモは、実際には嚴罰をもって対処したにも関わらず、「寛容」のポーズをとって描かれる。リソルジメントが熱狂的に叫ばれる十九世紀以降のイタリアにおいて、フィレンツェ共和国とメデイチ君主国、「自由の擁護者」フィリッポ・ストロツツイと「自由の抑圧者」コジモ一世は、対比されて解釈され、ストロツツイは祖国のために戦った

英雄として持ち上げられた一方で、君主制国家研究が停滞した。

ここで著者は、「自由の擁護者」とされてきた敗軍の将フィリッポ・ストロツツイに着目し、「共和主義者」や「自由」について考察する。ストロツツイは銀行業を生業にした商人貴族であり、貴族寡頭制において支配層の地位を占めていた人物である。そして彼はあくまで自らの富と名誉を守るために戦ったのであり、「共和国」の「自由」のために戦ったということではできないという。ここから著者は、当時「自由」という概念がどのように理解されていたのかに考察を進め、コジモを抑圧者、ストロツツイを自由の擁護者とする従来の単純な二分法を検討するために宮廷思想家バッティスタ・グアリーニ(一五三八―一六一二)の『政治的自由に関する論文』における「良き君主の統治は良き臣民の自由と矛盾しない」という新しい自由概念を取り上げる。グアリーニは宮廷人として著作を書いたと言えるが、体制変化に疲弊していた民衆も、強力で安定した君主のもと、新しい自由を保証されることを待ち望んでいた。政治機構の不安定性、階級間の闘争、軍事的経済的脆弱性という共和制都市国家の欠陥を自覚して、絶対君主制の領域国家建設を意図したのがコジモだったと著者は主張する。

第八章の主題であるシエナ戦争について重要な研究書^①が出ているが、絵画史料を活用していないと著者は指摘する。シエナ戦争は、フランス・シエナ陣営と皇帝・フィレンツェ陣営とに分かれて勃発し、後者による夜襲や激戦、包囲戦はシエナを苦しめ、一五五六年四月、降伏に追いやった。フィレンツェの領域拡大において最大の戦争とされ、最も成果を上げたシエナ戦争画を描くと

いう着想は、一五六二年にはヴァザーリの書簡に見られるものの、制作開始は一五七〇年であり、ヴァザーリは途中でローマに旅立ってしまふ。大勢の人々が列席するコジモの息子フランチェスコ一世のトスカーナ大公位継承式典（一五七二）にはかろうじて間に合ったというシエナ戦争画は、美術的な価値は低いとされてきたが、政治史的・軍事的観点から考えると重要な意味を持つものだと著者は述べる。

終章では、パラッツォの天井画と壁画は、国内外に正統な君主としてコジモ一世の威光を示すことによって、「トスカーナ大公位」の称号を獲得するために制作されたことが強調される。「フイレンツェおよびシエナの公爵」という称号にも満足できなかったコジモ一世に対し、ユグノー戦争中のフランス・カトリック陣営への支援などの功績を認めた教皇ピウス五世は、一五六九年、「トスカーナ大公」の称号を授与する大勅書を発する。一五七〇年三月にローマにおいて、教皇の手によりコジモはトスカーナ大公として戴冠されたが、戴冠に反対した皇帝によって追認されるのはコジモの死から二年経った一五七六年のことであった。《トスカーナ大公コジモ一世に戴冠する教皇ピウス五世》という絵画が五百人広間の側壁に完成したのは、第三代トスカーナ大公フェルディナンド一世の時代（一五九二）であった。この絵画には戴冠されるコジモが描かれるのだが、背後には、長男である第二代大公フランチェスコ一世と、四男でありかつ注文主である第三代大公フェルディナンド一世も描かれている。絵画の中で、兄フランチェスコの顔は暗く描かれ、弟フェルディナンドははっきりとした表情で描かれている。後継者としてアピールするという必要

性がフェルディナンドにはあり、彼もまた美術を政治に利用したのであったと本章は締めくくられる。

以上が本書の概略である。フイレンツェは、歴史的建造物や美術品が数多く残るヨーロッパ有数の都市であり、全体が美術館・博物館のようである。また一五世紀以降のフイレンツェにおいては、メデイチ家をはじめとする都市の支配層が美術作品や建築物を利用した文化政策を展開しており、美術史、建築史、文化史、政治史は関連し合っている。それぞれの分野の蓄積を活用して、架橋的なアプローチが可能である現在、歴史学と美術史を結びつけて一六世紀のフイレンツェ政治史を解明しようとする本書のアプローチは有効であり、都市の空間を、中心部パラッツォ・ヴェッキオから立体的に読むことができる。また本書は、「共和制」や「君主制」という概念の二分法を再検討することで、従来「自由の抑圧者」とされてきたコジモ一世に対して、寡頭制のもとで特権を享受してきた旧支配層である「共和主義者」を抑えて強いトスカーナ大公国を内外に知らしめた新しい君主という評価を与え、停滞してきた一六世紀のトスカーナ大公国研究にも新たな光を与えていると言えよう。

著者の、美術作品から政治を読むというアプローチには、近年の表象研究に共通する要素がある。北イタリア政治史を専門とするガンベリーニは、「言葉の、口述の (verbal)」なものに限らず、儀礼に現れる身振りや絵画における図像も含めて「言葉 (language)」と見なしたうえで、その「language」が政治の場で果たす機能を主張する。^②この「language」は、政治的メッセージを伝

えるためのツールとして、また新たなルールや意味、そして現実をも生み出すコミュニケーションのコードとしての機能を持つとされる。確かに、図像は字による表記ではないために、読み手の主観や背景に大きく影響を受ける史料と言えるが、作品そのもののみならず、作品が生み出される社会環境や過程に着目する著者の視点は、視覚表象がもつ政治的機能をより説得的に分析している。

このように本書の方法論と成果の意義を認めた上で、さらに検証すべき点も明らかになったと思われる。ここでは、以下の二点に絞って論じたい。

一つに、パトロネージの位置付けが挙げられる。著者は本書の中では、美術史の分野でのパトロネージへの関心の高まりを指摘した際と、また注文主コジモ一世・画家ヴァザーリ・構図助言者バルトリの三者の相互関係(第二・四章)を分析する箇所、パトロネージを取り上げている。徳橋曜が明らかにしているように、中近世のフイレンツェの社会においてパトロネージの網は広がり、都市で生活する者は、それに携わることなしには公私に関わらず生きてはいけなほど重要なものであったとされる。本書のフイレンツェのごく中核部に対象を絞るというミクロな分析の有用性を認めることができるが、宮廷や都市を舞台とした、より多様なパトロネージ関係における都市の文化政策やその政策の意図を分析するという研究が今後望まれる。また、同じパトロネージ関係の中で作品が制作されるといっても、著者前書(『パトロンたちのルネサンス』NHKブックス、二〇〇七年)で考察した、あく

までも都市のために作品が制作されていた一五世紀と、一人の君主の自己喧伝のために作品が制作されるようになった一六世紀との時代背景・風潮の推移は分析の余地がある。一五世紀のフイレンツェ共和国においては、銀行家でもあった大商人が、「金貸し」という罪の意識から逃れるために、市民的・宗教的義務として建築物・美術品に「清く正しく消費する」、その中で職人たちと契約を結びパトロンとなる。さらに個人的な富の蓄積を忌み嫌う共和主義的精神に対する弁明として、「豪華」という古典的美徳を引用する形で、フイレンツェ市民は自己顕示欲とその抑制に折り合いをつけながら生きていたとされている。作品の注文主であるパトロンを取り巻く環境やその背景から、一五世紀と一六世紀の政治体制を比較する視点も、中近世フイレンツェ史を考える上で有効であろう。

もう一点は、「自由」をめぐる問題である。一五世紀の共和制時代については、徳橋氏が、メディチ家の影響力が強まる中、フイレンツェ市民の「自由」が条件付きのものに、政治体制も貴族寡頭制となっていく過程を論じた。一六世紀フイレンツェにおける「自由」をめぐる問題は、第七章において扱われており、宮廷思想家グアリーニによる「良き君主の統治のもとで臣民の自由は守られる」という「新しい自由概念」が受容されていたという。しかし、共和制的伝統が残るフイレンツェを扱う以上、その「自由」と「統治」という二律背反するような概念がどのように折り合いをつけながら当時の社会に広まっていたか、また統治する側と自由を奪われる側はどのようにこれらの概念を捉えていたのか、という問題の検証もさらに必要となってくる。これらの検証によ

って、一六世紀における「新しい自由概念」が最終的に受容されるまでに生まれた反発やすり合わせも含めたプロセスに迫ることができるのではないか。

また「新しい自由概念」はフイレンツェに特有のものであったのだろうか。もちろん、第八章で扱われたシエナの「自由」や、第三章で扱われた五百人広間の天井画に描かれているピストイアやアレツォ、ヴォルテツラなど、フイレンツェの領域に入った近隣中小都市の「自由」とフイレンツェ市民の「自由」を同列に扱うことはできない。しかし、中小都市がフイレンツェの領域に併合される過程では、フイレンツェによる統治の正当化という論理が必要であつたはずだろうし、その論理を説得的にプロパガンダしていた主体も存在したはずである。「自由」の概念を扱う以上、本書で中心的に検討されているフイレンツェの都市内にとどまらず、フイレンツェから波及した自由の観念はどのようにトスカーナの周辺領域に影響を与えていたのかという視点もまた必要だと思われる。いわゆる「統治された側」にあたる周辺都市に着目することは、「統治する側」のフイレンツェ中心に偏らずに、一六世紀トスカーナ史や領域国家史を総合的に考える上で有効な観点なのである。

さらに当時の為政者は「寛容」や「徳」といった言葉も多用したが、文書や図像史料上でこれらの言葉が使われている文脈を検討することで、君主制支配の理念と実態という問題を再考することができないのではないか。一五世紀前半の市民的人文主義の興隆、一五世紀後半のメディチ家を中心とした寡頭政治およびイタリア五大都市の緊張関係、一五世紀末から一六世紀初頭のイタリア戦

争と、度重なる危機を経験したフイレンツェでは、価値観・基準の変化が繰り返されており、どれか一つの要素から「共和制である」あるいは「君主制である」などと判断することはできない。むしろ、様々な思想・観念が積み重なり、モザイク状になっている状態として、中近世フイレンツェの美術品・建築物を読み解いていく必要があるからこそ、それらの製作過程や式典のための用途を分析するアプローチが活きてくるのである。このようなフイレンツェの背景においてこそ、為政者の意図が反映されている図像史料の分析による政治史へのアプローチという本書の方法は有効であろう。

最後に、著者の研究の姿勢は本文中の次のことばに現れていると言えよう。「どんな事件（出来事）が選ばれ、どんな事件が選ばれなかったのか、何が描かれ、何が描かれなかったのか、そしてそのような選定の基準は何だったのか」、「政治宣伝用として描かれた歴史は、客観的な歴史ではなく、かくあれかしと願った歴史、見てほしい歴史、訴えたい歴史である。」（本書、一一二頁）歴史学の対象は、実際に生じた出来事や事実だけではない。本書のように、図像を史料として、君主に「なろうとした」コジモ一世の試みや過程を描くことも視点も必要である。それは、事実とされているものの裏側にあって、今まで顧みられなかったものをあえて覗く試みでもある。また、史料が豊富で研究環境に恵まれているがために細分化する傾向にある中近世イタリア史研究において、美術史と政治史を結ぶ著者の研究は、分野間の対話とその成果を見事に示している、ということを主張して本書評を終える。

- ① A. D' Addario, *Il problema senese nella storia italiana della prima metà del Cinquecento*, Firenze, 1958. R. Cantagli, *La Guerra di Siena (1552-1559)*, Siena, 1962.
 - ② A. Gamberini, "The Language of Politics and the Process of State-building", in: A. Gamberini and I. Lazzarini (eds.), *The Italian Renaissance State*, Cambridge, 2012, pp. 404-424.
 - ③ 徳橋曜「一五世紀のフィレンツェ社会における「友人関係」『イタリア学会誌』四四、一九九四年、一五三～一七六頁。
 - ④ 徳橋曜「想像のレスプブリカーフィレンツェにおける共和政理念と現実—小倉欣一編『近世ヨーロッパの東—西—共和政の理念と現実—』山川出版社、二〇〇四年、一二四～一四九頁。
- (B6判 x v+二八+九頁 二〇一五年十月
ミネルヴァ書房 税別四〇〇〇円)
(一橋大学社会学研究科博士後期課程)